

勤労体験学習で プログラミング＆ 3Dプリンターに挑戦！

10月8日から10日の3日間、八幡中学校2年生の加藤進太郎さんと森大岳さんの2人が、HUB GUJOでの勤労体験学習として小学校のプログラミング体験講座のサポートや、3Dプリンターを使ったモノづくりを体験しました。市内の小学校では、2020年度からプログラミング教育が必修化されることを前に、高学年の授業の一環として「プログラミング体験講座」を開催しています。今回2人には、小川小学校での体験講座の補助スタッフの一員としてお手伝いをしてもらいました。



加藤さん(右)と森(左)さん

勤労体験学習1日目は、ロボットの車をプログラムで制御したり、スクラッチという教育用プログラミング言語を使う研修を受けました。2日目は、小川小学校の体験講座の補助スタッフに挑戦しました。補助スタッフは、パソコン操作で戸惑ったり困って

いる小学生をサポートする仕事です。当初2人がマウスを握り、教える場面もありましたが、小学生自身ができる部分ではそつと見守り、戸惑っている時には手助けするといった、小学生の力を引き出すためのサポートをしてくれるようになりました。



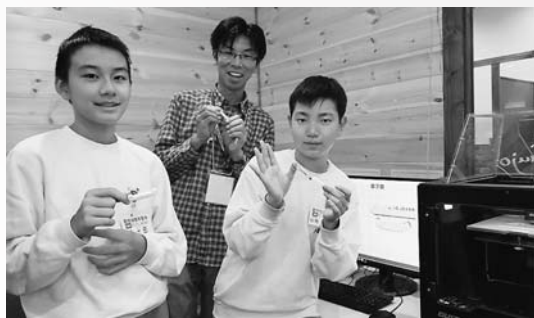
みんな、がんばりました！



小川小学校の講座をサポート

フを加えたデータを作り、そのデータを3Dプリンターに送信して試作品を成形しました。IT技術が発達し、AI(人工知能)なども活躍する近い将来。これから社会に出ていく子どもたちは、IT技術を活用しながら「人間だからこそできる判断と指示」を迫られていくことでしょう。今回の勤労体験学習は、新しい技術を学び、豊かな人間性から生まれるモノづくりに挑戦する貴重な機会になりました。

問 HUB GUJO
67・9239



3Dプリンターでオリジナルグッズを作る

みんなの地域はみんなで守る自主防災活動のススメ

災害時に大切なことは、自分で自分の身を守ること、そして、地域住民がお互いに助け合う姿勢です。自分たちのまちは自分たちで守るという心構えで、積極的に自主防災組織の活動に参加し、地域防災力を高めましょう。

阪神淡路大震災の際、要救出者約3万5千人のうち約8割にあたる約2万7千人が家族や近隣者により救出されました。いざというときに地域が力を合わせて協力するためには、日頃の自主防災活動が重要となります。

平常時の活動としては、地域住民への防災意識の普及活動、地域住民の災害への備えの促進活動、防災用資機材の整備、防災訓練の実施と訓練結果の不備の改善、地域コミュニケーションの確保といった活動が挙げられます。

また、災害が発生したときには、情報収集・伝達活動(連絡及び通報)、救出・救助活動、初期消火活動、水防活動、医療救助活動、避難誘導、給食・給水活動といったことを行うこととなります。

配慮を要する人への地域での支援体制づくり

地域には、災害発生時の避難に配慮が必要な人たちがいます。被害を減らすために、地域での支援体制づくりに取り組みましょう。ただし、安全に支援することが大切であり、安全が確保できない状況では、無理は禁物です。

況では、無理は禁物です。

◆高齢者・病人に対する支援

複数人に対応しましょう。緊急のときは、おぶつて避難しましょう。

◆外国人に対する支援

日本語をある程度理解できる人であれば、避難所までのルートなど必要な情報を提供しましょう。日本語がほとんど理解できない人の場合は、周囲の人が避難所まで誘導しましょう。

◆目の不自由な人に対する支援

「お手伝いしましょうか」など、まず声をかけましょう。誘導するときは、杖を持った方の手を取らない、肘の当たりに軽く触れて半歩くらい前をゆくりと進みましょう。

◆肢体の不自由な人に対する支援

障がいに合わせて誘導方法を確認しましょう。車椅子の場合は、階段は必ず3人以上で援助しましょう。上りは前向き、下りは後ろ向きで移動するようにしましょう。

◆耳の不自由な人に対する支援

話すときは近くで相手に顔を向け、口は大きくはっきり動かして話しましょう。わからないようであれば、紙とペンによる筆談で対応しましょう。手のひらに指先で字を書いて筆談することも有効です。

※その他、妊娠中の人や知的障がい、精神障がいがある人などへも配慮しましょう。

(参考) ぎふ防災ハンドブック2019年度版

問い合わせ先：総務部総務課
TEL 67・1832